

富士山南麓厚原第3風穴について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-06-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 篠ヶ瀬, 卓二 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00025225

富士山南麓厚原第3風穴について

篠ヶ瀬卓二*

1. はじめに

富士市にある厚原第3風穴は、東京電力株式会社沼津支店の委託した電力ケーブル埋設工事で、住友電設株式会社が作業中、平成5年3月2日発見され、富士市役所に通報された。その結果、富士市の文化振興課が主体となって調査を進め、静岡県地学会の元会長小川賢之輔氏のご指導をいただき、筆者も調査に加わった。すでに旧聞に属するようなのであるがその様子をお知らせする。

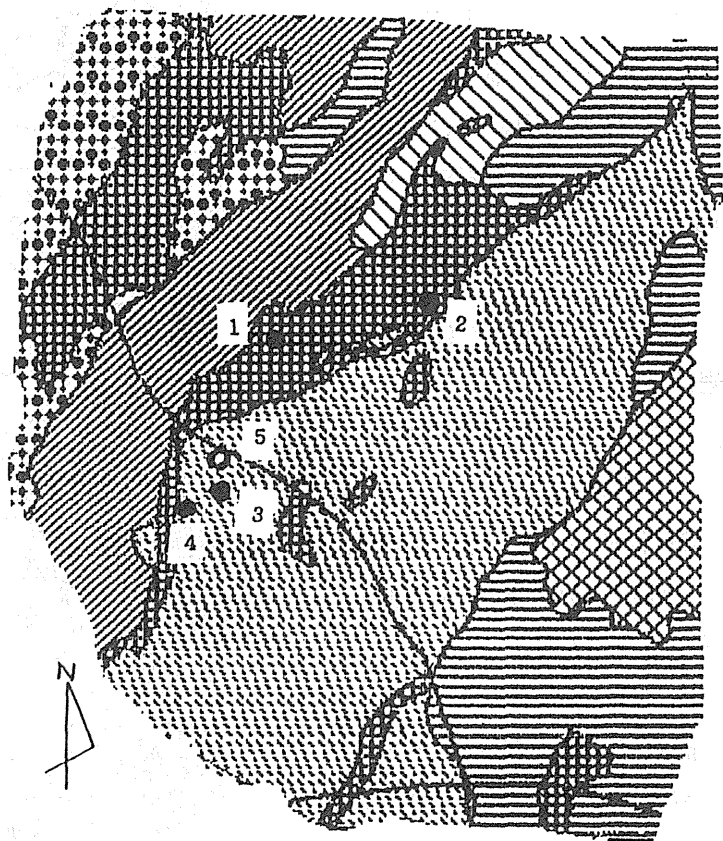
2. 厚原第3風穴の周辺の地質について

この地域の地質略図は右図のようになる。

古い方からあげると、古富士泥流・新富士火山大淵溶岩流・曾比奈溶岩流・曾比奈溶岩流上扇状地堆積物・笹場溶岩流・入山瀬溶岩流・大坂溶岩流で、古富士泥流を除いていずれも約11,000~8,000年前の活動の新富士火山に由来するものと考えられる。

厚原第3風穴のある地域は、新富士火山の大淵溶岩流の分布地域である。

大淵溶岩流は、古富士火山の噴出から数千年を経て噴出した新富士火山の最も古い溶岩流で基底溶岩とも呼ばれている。この基底溶岩は、新富士火山の頂上噴火の噴出物で、広範囲に流れだし、津屋弘達命名による富士市域の大淵溶岩流、富士宮市域の浅間神社湧玉池~沼久保~富士川河床に分布する大宮溶岩流、南東



- 1 八幡穴 2 不動穴 3 厚原第1風穴
- 4 厚原第2風穴 5 厚原第3風穴

- 大坂溶岩流 曾比奈溶岩流 I
- 入山瀬溶岩流 大淵溶岩流
- 笹場溶岩流 I 古富士泥流
- 曾比奈溶岩流上扇状地堆積物

図1. 本調査地域の地質略図

* 富士市立大淵中学校

麓方面に流れた三島溶岩流等が知られている。

大淵溶岩流は、大淵扇状地（富士市北部の曾比奈付近を頂点として、鷹岡と吉原の間に広がる）から富士市西部では沖積層におおわれるが、旧国道1号線（東海道・現県道由比～富士線）の富士川橋東河畔の水神の森付近まで分布している。富士市内のボーリングの結果によると、田子浦港の駿河湾底110mのところにも分布している。この溶岩の特徴は、大形の1cmほどの白い斜長石を含んでいるので、他の溶岩と容易に区別できる。流れ下った時代は、富士川 JR 東海道線上流の河床に見られる大淵溶岩流直下の泥層（山崎春雄氏採取、地質調査所）に含まれる有機物の放射年代（木越邦彦氏測定、学習院大学）がBP 13,760±300年と測定されているので、この年代とほぼ同じか、より新しいことになる。また、大淵溶岩流は、溶岩流の流動にともない表面に縄目状の文様が残された縄状溶岩（パホイホイ溶岩）である。大淵穴原から城山町にかけての大淵地区の凡夫川に主として河床に標識的に分布しているところから大淵溶岩流と命名されている。

3. 厚原第3風穴近くにある他の溶岩洞穴

富士市穴原の大淵溶岩流分布地域には、知られているだけでも十数箇所溶岩洞穴があるが、不動穴と八幡穴、厚原風穴が日本火山洞窟学会に登録されている。

(1) 八幡穴

八幡穴は、大淵溶岩流の中で最も規模が大きく、内部の様子からいっても最もすばらしい溶岩洞穴である。西富士バイパスの北側・富士市久沢字大久保の標高155mのところにある。

地表から4mほど下がると入口があり、約7mの間は人がやっと伏せて通れるぐらいの穴になっている。入口部分が低くなっているので、雨の降る度ごとに水がたまるので通

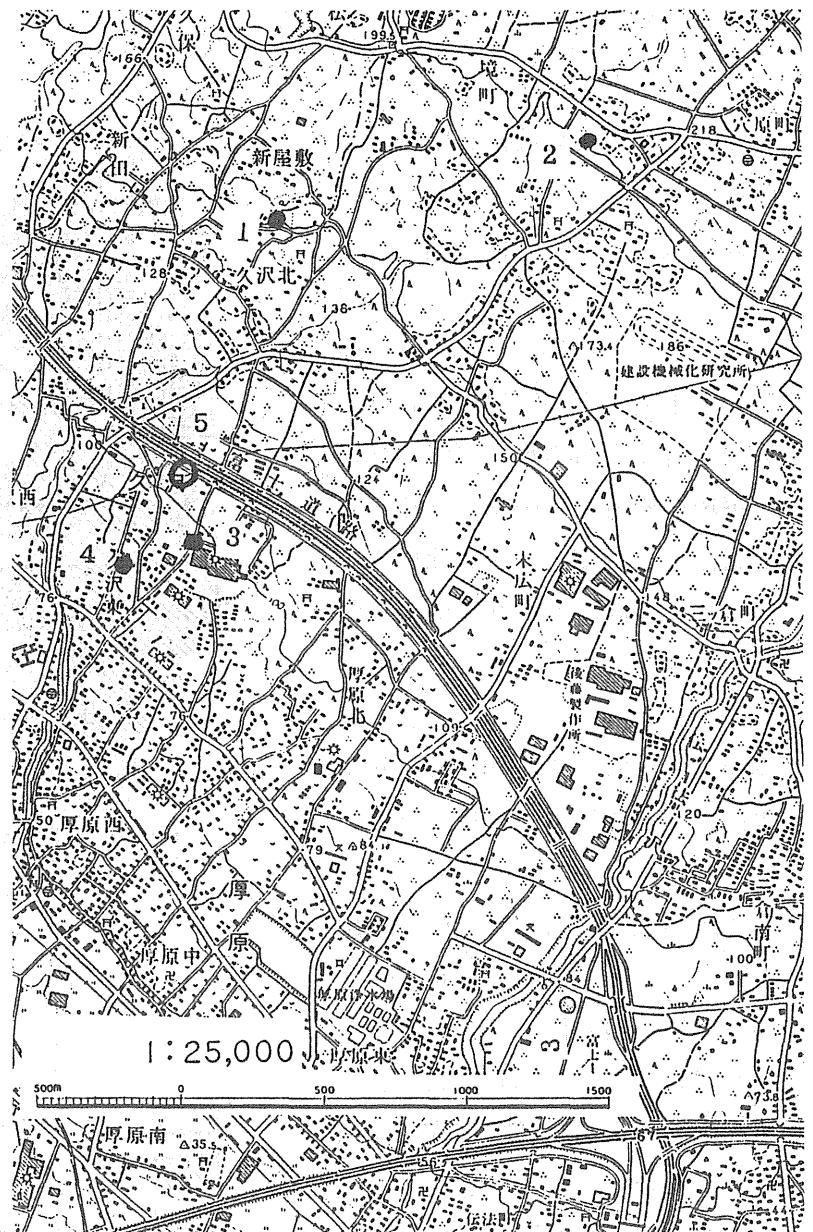


図2. 富士山南麓の洞穴

【国土地理院2万5千分の1地形図使用】

- 1 八幡穴 2 不動穴 3 厚原第1風穴
- 4 厚原第2風穴 5 厚原第3風穴

行不能になる。入口より20mほどで広がっており、中心部では立って歩ける。床の面に近い壁には、溶岩棚や溝ができています。入口より60m進んだあたりに支洞がある。支洞は80mほど進めるが天井が落下したり狭くなっているのが通りにくくなっている。中心をなす幹洞も80m程度である。

でき方については、中央ホール部分にガスが集結し、レンズ状の空洞ができ、入口に向かって床面を溶岩が流れて幹洞ができ、二次溶岩流が流れ下って支洞をいくつかつくったと考えられている。近くに、八幡神社があるので八幡穴の名前がつけられている。

(2) 不動穴

大淵の穴原地区の標高201mのところの畑の中にある溶岩洞穴で、全長約100mある。2本の洞穴がずれて重なる2階建・複合洞穴で、入口から約60mで狭い通洞で2本の穴がつながっている。入口から15mほど下りると、床面に雨水が流れこんでいて、常にぬかるんでいる。入口より60mのところは、落石が多くなっていて高さ1m内外の天井が続く。

2本の穴の連結部付近は、比較的広く、不動明王の石像が祭られているので、不動穴といわれているが、入口付近に馬頭観音が祭られているところから、観音穴とも呼ぶことがある。

(3) 厚原風穴 (厚原第1風穴)

昭和53年に富士市の防火水槽を建設工事中に発見された。

富士市厚原北・日本フィルコンkkの工場西北角の市道直下、標高98mのところにある。洞穴は、北東にあるM氏宅の6m下を貫いている。

幹洞はほぼ東西90mにのび、一番高いところでは立って歩ける。幅は広いところで5mある。2階建構造になっているのが特徴。はじめに、一次洞穴ができ、洞穴内へ流れこんできた溶岩流が再び溶岩洞穴をつくって二階建になった大変めずらしいものである。床面には、きれいな縄状の溶岩の流れが見られ、天井からは、つららのようになった溶岩鍾乳石が垂れ下っていて見事である。また、壁面には珪酸華や炭酸華ができています。

4. 厚原第3風穴について

厚原第1風穴から北北西に約300mの西富士バイパスの南側の側道(富士市久沢浅ヶ久保の市道・久沢大久保2号線)の地下で見つかった。

簡単に巻き尺とクリノメーターを頼りに測量をした結果、幹洞は約51mの長さがあり、幅は広いところの中心部で7.2m、先端に近いとこ

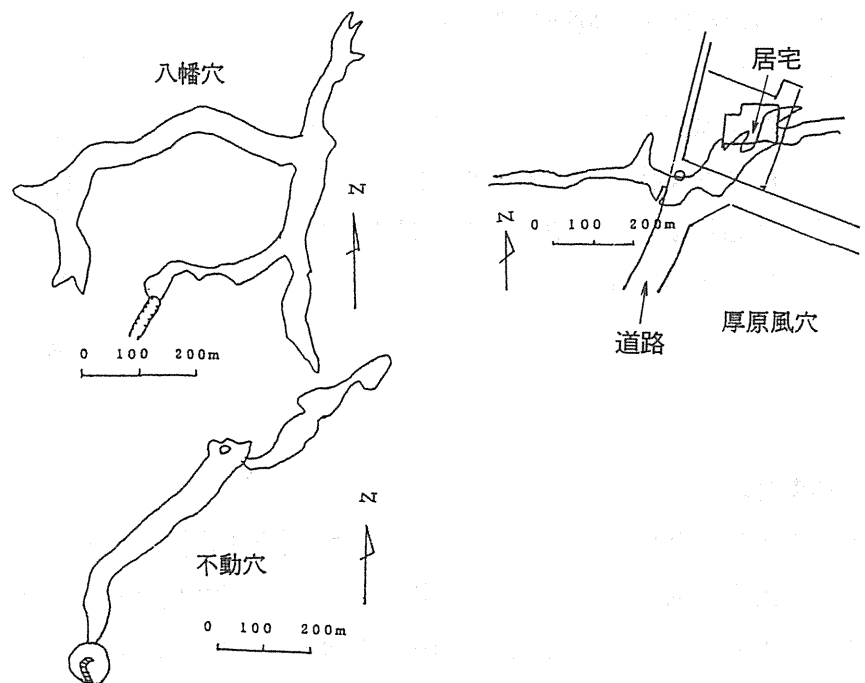


図3. 溶岩洞穴の実測図【小川賢之輔氏原図】

ろで4.1mであった。床面には、割れ目から流れこんだ泥土が10cmほどつもり定かでない。また、珪酸華・炭酸華も多少見られたが、きれいなものは見られなかった。溶岩棚も高さ10~20cmのものがあったが、八幡穴のようなものは見られない。特徴のない溶岩洞穴であるが幹洞を見るかぎり、支洞が無いのが特徴である。全体の溶岩の厚さはどんなに薄く見積もっても5m以上で、おそらく10m以上はあるだろうと推定される。

5. まとめ

厚原第3風穴についての調査結果は次のようになる。

- (1) 幅10m以下のほぼ南北に横たわる総延長51mの溶岩洞穴である。
- (2) 周囲が大変きれいで、溶岩鍾乳石があるところから、中央部にまずガスが集結し、レンズ状の空洞ができたと考えられ、構造が簡単な洞穴である。
- (3) 珪酸華・炭酸華も多少あったが、特徴のない普通の洞穴である。
- (4) 洞穴の北半分をしめる部分は、西富士バイパスにかかっている関係で、溶岩の天井の落盤が多く、入るのは危険である。道路の構造上、西富士バイパスは盛り土部分のため陥没の危険は無いものとみられる。
- (5) 内部を保存することは、すでに半分つぶれたような状態であるため、配慮する必要は感じない。市や県の天然記念物指定には、該当しない。

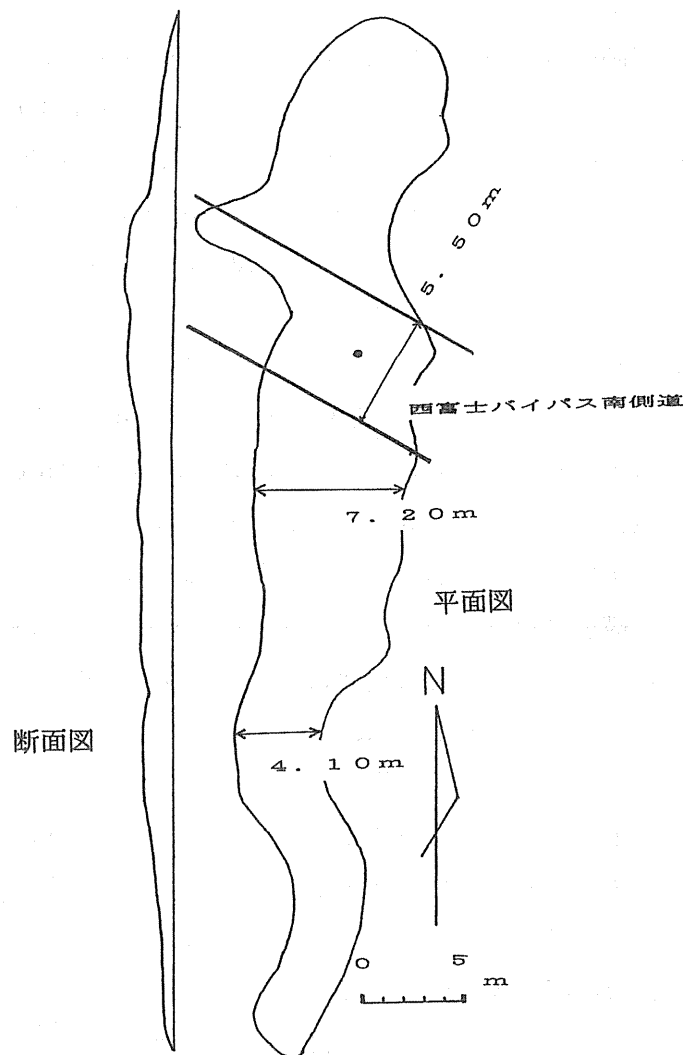


図4. 厚原第3風穴の実測図

《参考文献》

- (1) 小川賢之輔他 (1986)「富士市の自然」【富士市】 P 276~287
- (2) 富士文化財愛好会 (1986)「富士市の石造文化財」【富士市教育委員会】
- (3) 宮地直道 (1988)「新富士火山の活動史」 地質学雑誌 第94巻 第6号 P 433~